

歴史記述のフィクション性と狂人  
『ミドロージャンの心臓』と『バーナビー・ラッジ』

矢次 綾

はじめに

1970年代から80年代にかけてポストモダンの歴史学者が歴史記述のフィクション性を提唱した。その中心的な役割を果たしたヘイドン・ホワイトは、歴史として伝えられるものが現実の物語ではなく、「言語に依拠した実在であり、言語の秩序に属する」(White 37)と主張している。彼らによれば、歴史記述は資料解釈の産物であって、発見するものではなく、言語を用いて創造するものである。この見解は歴史家のみならず文学者を巻き込んだ論争を招いたが、その渦中にあったA・S・バイアットは、19世紀の有識者が既に歴史記述は作り事だと認識していたことをブラウニング論の中で指摘した。その証左としてバイアットは歴史家のルナン(Ernest Renan)を挙げている。ルナンは『キリストの生涯』(*Vie de Jésus*, 1863)においてラザロの奇跡をベタニヤの家族によって創り上げられた宗教的な方便と見なしているが、『キリストの生涯』を読んだブラウニングは、ルナンが公平無私の視点からキリストの生涯を再構築していないと批判した(Byatt 25-27)。そして、「霊媒・スラッジ氏」(Mr Sludge: The Medium, 1864)の中で、歴史記述一般の持つ恣意性を以下のように指摘している。<sup>1</sup>

Each states the law and fact and face o the thing  
Just as he d have them, finds what he thinks fit,  
Is blind to what missuits him, just records  
What makes his case out, quite ignores the rest.  
It s a History of the World.

歴史記述の恣意性はヴィクトリア朝の精神風土の一端を表している。ディケンズも小説中で同様の指摘をしているからである。ディケンズに限らず当時の多くの小説家に影響を与え、歴史小説の量産を招いたスコットも歴史記述は書き手の恣意によって創り上げられたフィクションだと認識していたと考えられる。もっとも、ディケンズとスコットの歴史記述の恣意性に対する態度には違いがある。本稿では、この違いについて検討することによって、彼らの歴史に対する根本的な姿勢を明らかにする。さらに、ヴィクトリア朝における歴史記述のあり方へと考察の範囲を広げたい。なお、本稿で歴史と呼んでいるのは、日付や場所と共に語り伝えられ、実際に起きたと一般に認識される過去の出来事の総体のことである。そして、そのような出来事を題材とし、読者の過去への意識を喚起させる小説

を広く歴史小説と呼んでいる。20 世紀末にヒストリオグラフィック・メタフィクションが一潮流を創るなど、歴史を扱う小説が多様化した現在、ルカーチが「個人の運命と歴史の一般的な運動との有機的な繋がりを描出する」(Lukács 20) という命題を課した 1930 年代とは異なり、歴史小説を厳密に定義することは困難だと思われるからである。

## 1 小説家から見た歴史記述のフィクション性 スコットとディケンズの場合

ディケンズは、例えば『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50 . 以下『コパフィールド』と略記)の中で歴史記述の恣意性について指摘している。まだ幼い同名の主人公が、伯母のトロットウッド (Betsey Trotwood) の同居人で狂人のディック (Richard Babley) と第 17 章で言葉を交わす場面を見てみよう。

I suppose history never lies, does it? said Mr. Dick, with a gleam of hope.

Oh dear, no, sir! I replied, most decisively. I was ingenuous and young, and I thought so.

<sup>メモリアル</sup> 自伝を執筆中のディックは、姉が夫の暴力に悩んでいた時期にさしかかると、清教徒革命で処刑されたチャールズ一世の首が目の前にちらついて先に進めなくなる。姉の家庭的な不幸と、良き家庭人だったのに無残な死を遂げたチャールズ一世とが、彼の頭の中で奇妙にも結び付いているのだ。<sup>2</sup> 引用一行目の付加疑問文は、1649 年に処刑された国王が 18 世紀の終わり頃に不幸だった姉と関わってくることに對し、狂人のディックが戸惑って発したものである。<sup>3</sup> それに對する「歴史記述に嘘なんてありませんよ」という子供のデイヴィッドの返答に關する、語り手である大人のデイヴィッドのコメント 「自分は無邪気で幼かったから、そう思ったのだ」 が歴史には「嘘」があるという作者の真意を伝えている。この場合の「嘘」とは何を指しているのか。それは、1649 年 1 月 30 日にチャールズ一世が処刑されたという歴史的な 事実 が、編纂者の恣意によって形成されたフィクションに過ぎないということであろう。チャールズ一世が首を打ち落とされたという出来事が日付と関連づけられ、イギリス史を形成する事実として一般に認識される過程において、スラッジの言葉を借りるなら「ただ、おのれの身の証が立つことのみを記録に留め、他はことごとく無視する」恣意が多少とも作用しているはずである。事実が認識される過程で恣意が働いているのであれば、後世を生きる人間が自身の経験と歴史的な事実を関連づけることを、狂気の沙汰と断ずることは必ずしもできないだろう。ディケンズが狂人の言動を通して、国家の歴史と個人の歴史の混同を狂気の沙汰と見なすことに對する疑念を表している、と考えることもできる。国家の歴史を語る際に、個人の歴史との関わりを排除してしまうこともまた、恣意が働いた結果と判断することができるからだ。実際に、ディケンズは二作の歴史小説 『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*, 1841 . 以下『ラッジ』と略記)と『二都物語』(*A Tale of Two Cities* , 1859) の中で、歴史に

おける国家と個人の関わりについて考察している。中でも『ラッジ』においては、その前半を登場人物の個人的な不平不満を構築するのに費やし、後半で勃発するゴードン暴動（Gordon Riots, 1780）という国家規模の事件が個人的な事情と密接に関わっていることを示している。

ディケンズは『コパフィールド』出版後の1851年から53年にかけて、雑誌『ハウスホールド・ワーズ』に『英国史物語』(*A Child's History of England*)を連載した。彼はその10年近く前において既に子供のための歴史書を執筆中であり、その理由として、文人のジェロルド(Douglas Jerrold)に宛てた1843年の書簡の中で、「息子(長男チャールズ)が高教会派の観念に取り憑かれないように」(*Letters* 3: 482)することを挙げている。換言すれば、オックスフォード運動という彼から見れば望ましくない潮流が、宗教改革以前の過去を美化する誤った歴史認識によってもたらされたとディケンズは考え、自身の考える歴史的な真実を息子に伝えるための歴史書執筆を宣言しているのである。それでは、ディケンズの考える歴史的な真実とは何か。ディケンズは『英国史物語』執筆にあたり、学校で広く用いられていたキートリー(Thomas Keightley)の『英国史』(*The History of England*, 1850)を主要参考書として用いたのであって、複数の歴史書を参照するなどして、そこに書かれた事実関係の誤りを正したわけではない。この点から、彼にとっての歴史的な真実は、事実関係の正誤とは無関係である。ディケンズは『英国史物語』の中で、例えば、聖人として称えられる聖ダNSTAN(?-988)を虚言癖のある利己的な人物として描く(第4章)など、通常はあまり考慮されない個人的な性質に着目した歴史を展開させている。このような歴史の描き方は、例えば、マコーリー(Thomas Macaulay)の『英国史』(*The History of England from the Accession of James II*, 1848-61)と対照的である。マコーリーは、イギリスの立憲君主制が名誉革命以後ずっと進化の一途を辿ったという第1章の序文で示した見方に固執するあまり、その見方に合わない歴史の可能性をすべて排除していると考えられるからだ。以上を考慮するなら、ディケンズにとっての歴史的な真実は、歴史のあらゆる可能性を考慮することにあると言えよう。

『英国史物語』の執筆態度からも、ディケンズが国家の歴史と個人の歴史の関連づけを肯定していることは明らかである。それにしても、なぜ、歴史に関するこのような態度の正当性を、ディケンズは『コパフィールド』でディックという狂人の言動を通して示唆しようとしたのか。それは、人々が正常だと思い込んでいるものの見方に疑問を投げかけるためであろう。ディケンズは歴史に関する議論に限らず、常人の気づかない驚嘆すべき真実を狂人に提示させる場合が多い。『ピクウィック・クラブ』(*The Pickwick Papers*, 1836-37)における挿話の一つ「狂人の手記」(*A Madman's Manuscript*)でも、人々が平穏な生活と信じているものが果たして本当に平穏と言えるのかどうかについて、ディケンズは狂人の視点を通して疑問を呈している(第19章)。

スコットも歴史記述には恣意が作用していることを認識し、歴史小説の中で国家の歴史と個人の歴史の関連性について考察している。その証拠として、イギリス国内における被

植民者意識を持つ彼が、歴史小説においてスコットランド人の視点から歴史を書き直していることが挙げられる。例えば、彼は『ミドロージャンの心臓』(*The Heart of Midlothian*, 1818. 以下『ミドロージャン』と略記)において、キャメロン派の農民の娘ジーニー (Jeanie Deans) がキャロライン王妃 (Caroline of Ansbach) に対してスコットランドの道徳的優位性を示唆するという虚構の物語 (363-70) 。

このように、小説家が歴史的な背景の下で創り上げる、虚構を含む物語を、本稿では以降、フィクションと呼ぶことにするを導入している。そうすることによって、スコットランドが政治的にイングランドに併合されても、精神的には独立していることを主張しているのである。スコット自身が1830年版『ミドロージャン』の序文で認めている (3-7) ように、<sup>4</sup> 彼は徒歩でロンドンへ出向き、嬰兒殺害の罪により死刑宣告を受けた妹の特赦状を獲得したウォーカー (Helen Walker, ?-1791) の物語に感銘を受け、名前と事実関係に変更を加えて、スコットランドの不屈の精神を象徴する人物として『ミドロージャン』に描き込んだ。要するに、スコットは歴史を語る際に虚構の物語を導入することによって、イングランド人の立場から見た一面的な歴史記述に反発しているのである。

スコットは『ミドロージャン』に狂女のマッジ (Madge Wildfire) という架空の人物を登場させることによって、一面的な歴史記述に反発している。マッジは、検事のシャーピトロー (Sharptitlaw) と元盗賊の看守ラトクリフ (James Ratcliffe) が犯人逮捕の見地から、ポーティアス暴動 (Porteous Riots, 1736) の先導者ロバートソン (George Robertson, aka Staunton) の過去を構築しようとすることに反意を示すのである。マッジはラトクリフに水を向けられて、暴動の夜のロバートソンがいかに立派に見えたかを恍惚として語るが、検事からロバートソンの足取りに関する質問を向けられた途端に、口をつぐんでしまう (165-66)。要するに、彼女は情緒を刺激されて言葉巧みに語ることはあっても、他人による恣意的な過去の構築に助力することはないのである。

以上より、ディケンズとスコットの共通点として、国家の歴史と個人の歴史の関連を歴史小説の中で考察し、一面的な歴史記述への反発を示唆していること、換言すれば、歴史小説の中で特定の過去の物語を描くだけでなく、独自の歴史観を表明していることを挙げることができる。さらに言えば、ディケンズは『ラッジ』に同名の主人公、一方のスコットは『ミドロージャン』にマッジという狂人をそれぞれ描き込んでいる点でも共通している。もっとも、バーナビーはマッジや『コパフィールド』のディックとは異なり、作者の歴史に対する態度を代弁していない。バーナビーに代わってディケンズの姿勢を表現しているのは、バーナビーと常に行動を共にするカラスで、超自然的な能力を持つ「聖なる愚人」として入念に造形されているグリップ (Grip) である。次節以降で、ディケンズがどんな能力をグリップに付与しているか、そして、グリップを通して歴史に対するどんな考えを表現しているかを検証する。そうした上で、グリップとマッジ 超自然的な能力はないが、如才がなく機知に富む「賢き愚人」の言動を詳査し、スコットとディケンズ各々の歴史に対する姿勢を明確にしたい。

## 2 小説家の歴史に対する姿勢を体現する狂人たち

『ミドロージアン』のマッジが一面的な歴史記述に異議を唱えるのに対し、『ラッジ』のグリップは人間が歴史を語ることを妨げている。ディケンズがこのような大役をグリップに託した証拠として、彼が『ラッジ』完成直後にホール夫人 (Mrs. Hall) に宛てた書簡の一部がある。

[...] he loves to see human Nature in a state of degradation, and to have the superiority of Ravens asserted. At such time he is fearful in his Mephistophelean humour. (*Letters* 2: 438)<sup>5</sup>

メフィストフェレス的なユーモア 「オレハ悪魔ダゾ」という口癖 が特徴のグリップは、人間を凌駕する鋭敏な知覚の持ち主として最初から設定されている。だからこそ、鍵屋のヴァーデン (Gabriel Varden) という、清教徒革命以降のイギリス史において中心的な役割を果たしてきたプロテスタントの都市ブルジョアに対してでさえ、グリップは遠慮をしない。貴族の嫡男エドワード (Edward Chester) を襲った強盗と、バーナビーの母親 (Mary Rudge) を脅かしている人物とが同一であることを察して、ヴァーデンが吐いた言葉とそれに対するグリップの反応に着目してみよう。

It is as I feared. The very man was here to-night, thought the locksmith, changing colour. What dark history is this!

Halloa! cried a hoarse voice in his ear. Halloa, halloa, halloa! Bow wow wow. What s the matter here! Hal-loa! (60)<sup>6</sup>



ヴァーデンは引用二行目の感嘆文に続けて、強盗に関する歴史を語ろうとしている。しかし、強盗がラッジであることには気づいていないヴァーデンの無知を察して、グリップは彼が安易に歴史を語るのを妨げる。それが引用三行目以下のしゃがれ声の叫びだ。「墮落した状態の人間性」に対して特に鋭い観察眼を持つグリップは、フィズ (Hablot

K. Browne) によるイラストが示唆しているように、ラッジが母親に加えてバーナビーをも背後から脅かしていることを察知しているのである。

グリップは、ラッジの起こしたヘアデイル (Ruben Haredale) 殺害事件が小説中に蔓延する悪意の発端で、ゴードン暴動の要因であることも感知している。換言すれば、ラッジ個人について語ることが暴動に至るイギリスの歴史を語ることに同意であることを、グリップは認識しているのである。<sup>7</sup> その証拠として、グリップが悪の存在を発見するたびに「ポリー、やかんを火におかけ (Polly put the kettle on)」という<sup>ナースリー・ライム</sup>伝承童謡の一節を唱え、警笛を鳴らしていることが挙げられる。具体的には、ラッジが物陰から姿を現す場面 (152-53)、ヘアデイルが殺害されたウォレン (Warren) 屋敷を訪ねる場面 (210)、ゴードン (George Gordon) が暴動の最中にバーナビーを訪問する場面 (472-73)、さらには、「ジョン・ブル」(390) と呼ばれる悪意に満ちた治安判事に遭遇する場面 (389) において、グリップはこの一節を唱えているが、彼はなぜ治安判事の前でそうしなければならないのか。それは、権威による悪政が弱者に不満を抱かせ、結果的に暴動の要因を生み出したとディケンズが考えているからである。この傍証であるかのように、ディケンズは暴徒を「大部分は不当な刑法、不正な監獄規制と、最悪の警察によって生み出された、ロンドンの屑とも糞とも言うべき連中」(407) と呼んでいる。ディケンズは社会改革者的な視点から、また、敬愛するカーライルが『フランス革命』(The French Revolution, 1837) で示した歴史観に影響されて、<sup>8</sup> ゴードン暴動勃発前夜である 1770 年代後半と、チャーティストが今にも暴動を起こしそうな 1830 年代との間に共通する状況を見出した。そして、社会的権威に怠慢や悪政によって、望ましくない過去が繰り返し立ち現れるという循環的な歴史観を獲得するに至ったのである。

『ミドロージアン』のマッジも作者の歴史に対する姿勢 現実に起きたこととフィクションとを織り交ぜて自身の認識を表現するという姿勢 を体現している。彼女の狂気の症状自体が現実とフィクションの混同である。マッジはジーニーの妹エフィ (Effie Deans) と同様にロバートソンから誘惑され出産するが、子供を母親のマードクソン (Meg Murdockson) に殺害される (300-01)。それがショックで彼女は発狂し、その後に生まれたエフィの子供と自分の死んだ子供とを取り違えている。その一方で、彼女は歌謡というフィクションを利用して、現に存在する危機を他人に知らせることもある。その一例として、彼女が屠殺者の歌を謡いながら、ロバートソンに追手の存在を知らせ、逃走させる場面 (175-77) を挙げることができる。このようにマッジは「賢き愚人」としての狡猾さを示すと同時に、狂人に対する当時としてはごく当たり前と思われる処遇を与えられてもいる。母親の処刑が決まり錯乱したマッジは村人の嘲笑と暴力に遭い、スコットランドへの帰路にあったジーニーに助けを求める。しかし、ジーニーにはなす術がなく、彼女の同行者でアーガイル (Argyll) 公爵家令の「人情家」アーチボルド (Archibald) は狂女が詰め寄るのを恥ずかしく思いながら社会的権威に処置を求めるのみで、自らは援助の手を全く差し伸べていない (392-93)。そして、その直後にマッジは哀れな最期を迎えるの

である (396-97)。

狂人に対する残酷な対応をありのままに小説に描き込んだスコットとは対照的に、ディケンズは社会が狂人に施す措置を『ラッジ』の中で批判している。以下の引用は、治安判事がバーナビーを白痴だと知って、母親を叱責する言葉である。

Then why don t you shut him up? we pay enough for county institutions, damn em. But thou d rather drag him about to excite charity of course. Ay, I know thee. (390)

フーコーは、18世紀末に狂気が精神病として認定された時に理性と狂気の対話が完全に途絶え、狂気の側の「不完全な言葉のすべてが忘却の淵に沈められた」(Foucault x)と指摘している。同様にディケンズも狂人への権威の対応に異議を唱え、そのような権威が中心的な役割を担って構築してきた歴史を否定しているのである。狂人の処遇一つにも、歴史に対して否定的なディケンズと、フィクションを混同させても事実は事実として認めるスコットの違いが現れている。

### 3 歴史小説における事実とフィクションの配分

グリップが人間による歴史記述を妨げるのは、狂人の処遇に限らず、ディケンズが過去の歴史を肯定的に捉えていないためである。ディケンズが『ラッジ』の中で、歴史を培ってきた人物たちや歴史を守ろうとする人物たちを否定的に描いているのもそのためである。そのような人物の筆頭として、ウィレット (John Willet) が挙げられる。16世紀以来のメイポール亭の歴史を守るウィレットは、宿屋の未来を担うべき息子のジョー (Joe Willet) に無力感を植え付けている愚鈍で偏狭な人物である。ディケンズは、そんな亭主が大切にしている宿屋の建物と歴史の両方を暴徒によって破壊させる (450-54)。そうすることによって、宿屋の歴史との絡みの中で紹介されるヘンリー八世以来のイギリスの歴史 (5) も、宿屋の歴史と同様に守るに足るものではないことを主張している。<sup>9</sup> ディケンズは、「徒弟騎士団 (Prentice Knights)」のタパーティット (Simon Tappertit) や絞首執行吏のデニス (Ned Dennis) も、価値のない過去を守ろうとする人物として否定的に描いている。タパーティットは「古きよきイギリスの習慣を復活させる以外のあらゆる変化に抵抗」(76) するために、一方のデニスはカトリック教徒の権利拡大が刑罰軽減をもたらすと憂え (312) そういった彼にとって望ましくない進歩を阻むために、暴動に参加する。彼らは暴動鎮圧後に各々の所業に応じた罰が与えられるのである。<sup>10</sup>

このようなディケンズの姿勢は小説の構造にも表れている。ゴードン暴動が『ラッジ』の後半部に導入されているのは、その一例である。ディケンズはゴードン暴動に関する一般的な認識を否定するために、前半部で歴史上の事実とされる出来事にほとんど言及せず、今日までの歴史を担ってきた権威に対する弱者の不満の高まりという暴動が勃発するに足

る状況を前半部で蓄積している。それに対して、スコットはポータス暴動を小説の冒頭で描き、残りの部分をエフィによる嬰兒殺害事件 暴動の背景の一つとして創造したフィクション とその後日談に費やしている。そうすることによって、スコットは、市民を殺害したポータスの死刑を中止させた中央政府に対し、スコットランド人が憤怒したという歴史的な事実として認識されている物語と、農民に過ぎないジーニーがスコットランドの精神的優越を王妃に示唆する架空の物語との両方を『ミドロージアン』に両立させているのである。

ディケンズとスコットは暴徒の描き方においても対照的である。ディケンズが暴動をパフチン的なカーニヴァルとして描き、抑圧されてきた弱者が狂乱しながら不満を噴出させる様子を展開させた。その一方で、スコットは暴動の様子を写實的に再現し (Kroeber 132) 中央政府に対する暴徒の抑圧された怒りを描いた。ディケンズは想像力を働かせ、社会に対する不満がゴードン暴動を引き起こしたという彼の考える歴史的な真実を主張しているが、スコットは事実として伝えられる歴史を肯定するという姿勢を貫いているのである。<sup>11</sup> この姿勢は、ジーニーがスコットランドの優越を示すという偉業を達成する過程 (369-70) によっても裏づけられる。彼女がロンドンへ行く必要に迫られたのは、虚偽の証言をせず、妹から妊娠を打ち明けられていないという過去の出来事をありのまま告げたからに他ならない。また、ジーニーはロンドンへの途上で盗賊に誘拐された時、父 (David Deans) から聞いたキャメロン派の抵抗の歴史を想起して恐怖心を鎮めている (290)。<sup>12</sup> スコットは過去の事実を否定することに反意を示してもいる。その証拠は小説結末部におけるエフィの不幸である。エフィは息子 (the Whistler) と再会しても親子の名乗りを上げられないばかりか、それと知らない息子によって夫を殺害されてしまう (500)。これは、エフィが父と姉に背いてロバートソンの子供をもうけ、恩赦が与えられるや否やロバートソンと共に出奔した罪によるものではない。エフィは農民の娘としての過去を葬り、貴族の子女としての偽りの半生を構築した罰を受けているのである。

スコットは語り手である自身のことを『ミドロージアン』の中で「正確さを重んじる歴史家 (historian)」(87) と呼んでいるが、これはフィクションを織り交ぜても、事実は事実として扱う彼の姿勢を表明したものと考えられる。それに対し、ディケンズは『ラッジ』の中で自身を「年代編纂者 (chronicler)」(80) と呼んでいる。クローバーやケイスの言葉を借りるなら、ディケンズはスコットに反発するために (Kroeber 132-35, Case 129-30) 自身に対する呼称としてスコットが使用した「歴史家」を避けたということになるだろう。ディケンズが新進気鋭の作家として、先輩作家とは違う歴史小説のあり方を模索していた可能性は否定できない。とはいえ、ディケンズが『ラッジ』前半で次代を担う若者や社会的弱者の現状への不満を丹念に蓄積していることを考慮するなら、彼が反発しているのは、先輩作家の姿勢というよりも、望ましい現在をもたらしていない過去の歴史に対してであろう。そんな歴史から教訓など得られないというディケンズの思いを実証するかのように、『ラッジ』結末部で、獄中のゴードンは歴史を学んでいる (683)。過ちを繰



り返す傾向があるゴードンは 暴動に関する裁判で無罪判決を受けるものの、フランス王妃に対する誹謗中傷の罪で裁判にかけられ、有罪判決を受けに出頭せず逃亡したところを捕らえられ、服役することになった 歴史から教訓を得ようとするという過ちをこの期に及んで犯しているのだ。ディケンズは歴史に対する否定的な見方を小説結末部でも表明しているのである。<sup>13</sup>

おわりに マコーリーとスコットおよびディケンズ

以上、スコットとディケンズの歴史に対する姿勢の違いについて検討してきた。最後に、彼らとマコーリーの関わりを述べて、本稿のまとめにしたい。後世の歴史認識のあり方に多大な影響を与えたマコーリーは『英国史』執筆にあたり、マッキントッシュ (James Mackintosh) らホイッグ史観の先達者はもちろんトーリー党の歴史家ヒューム (David Hume) の業績からも多大な恩恵を受けたが、彼が歴史を記述する上で最も影響を受けたのはスコットであった。その一方で、マコーリーの歴史観は、現状に対する不満とカーライルの影響とに立脚するディケンズの歴史観と対照的である。要するに、マコーリーに着目することにより、スコットとディケンズの歴史に対する姿勢について重要な補足をすることができる。

マコーリーは『エジンバラ・レビュー』の中で、よい歴史家は政治や紛争だけに頓着するのではなく、歴史ロマンスの魅力である細かな事実を記述の中に取り入れるべきだと主張し、それをうまく行っているのがスコットだと指摘している (Trevor-roper 19)。スコットが『ミドロージアン』に織り込んでいる事実の一つとして、スコットランドの伝統文化としての歌謡を挙げることができる。スコットは歌謡を通してマジに事実とフィクションを織り交ぜさせながら、そして、郷土の文化への誇りを表現しながら、『ミドロージアン』を読み物としてより魅力的なものにしたのである。このように地誌的な要素を持つスコットの歴史小説に影響を受けて、マコーリーは『英国史』執筆にあたり、歴史的イベントの舞台となった場所を訪ね歩いたのであろう。マコーリーのスコットへの傾倒は、マコーリーの文学的な傾向のみならず、ヴィクトリア朝における歴史小説と歴史書の近しい関係を示唆していると言えるのではないだろうか。その類例として、ワイルドがカーライルの『フランス革命』を「19世紀最高の小説」と呼んでいることが挙げられる (Bowen, The Historical Novel 250)。

マコーリーはジェームズ二世の戴冠から 1832 年の第一次選挙法改正法施行に至る歴史を網羅する予定で、1839 年に『英国史』の執筆を始めた。マコーリーが立憲君主制の到達点の一つと見なした 1832 年から執筆開始の 39 年は、ディケンズが『ラッジ』を構想そして執筆した時期と重なっている。マコーリーとディケンズの過去と現在に対する見方には違いがある。前者が過去の着実な歩みは立憲君主制の到達点としての現在をもたらしていると考える一方で、後者は過去の悪政が蓄積されて弱者の不満を生み、ゴードン暴動と

同様の暴動が今にも起きそうな累卵の危機をもたらしていると考えている。ディケンズがマコーリーの『英国史』執筆の意図を察知していないとしても、スチュワート朝以来、プロテスタントが抱いてきたホイッグ史観に対して、反発を感じていた可能性は十分にある。だからこそ、ディケンズは、公式の歴史を語る資格を備えているはずのプロテスタントの都市ブルジョアで恐らくホイッグ党のヴァーデンが歴史を語るのをカラスのグリップに妨げさせているのである。

## 注

1. バイアットは1991年のブッカー賞受賞作品『抱擁』(*Possession: A Romance*, 1990)のエピグラフとして「霊媒・スラッジ氏」引用し、歴史記述のフィクション性に関する19世紀および20世紀における認識が小説のテーマの一つであることを示唆している。なお、心霊主義(Modern Spiritualism)は1852年にボストンの霊媒ヘイドン(Maria Hayden)によってイギリスに紹介されて流行した。
2. チャールズ一世はヴィクトリア朝における良き家庭人の象徴で、幼い我が子と一緒に肖像画に描かれることが多かった(高橋 254)。
3. 『コパフィールド』がディケンズの自伝的小説であることを考慮すれば、歴史記述に関するディック氏と幼いデイヴィッドの会話が展開しているのは1820年頃と推測される。したがって、ディックの姉が夫の家庭内暴力に苛まれたのは、18世紀の終わり頃ということになる。
4. 『ミドロージアン』からの引用は、引用文献に挙げたオックスフォード・クラシックス版より。この版は1830年に出版されたマグナム版(Magnum edition)を底本にしている。
5. ディケンズがこの書簡以外にも1841年の書簡の中でしばしばグリップに言及しており、例えば『ラッジ』の挿絵画家の一人キャターモール(George Cattermole)に宛てた制作依頼の書簡の中で、グリップについて事細かに指示している(*Letters* 2: 198-99)。もっとも、グリップのイラストはすべてフィズが描いていることから、キャターモールはディケンズの指示を拒絶したと考えられる。
6. 『ラッジ』からの引用は、引用文献に挙げる2003年のペンギン版より。
7. ヘアデイル殺害事件とゴードン暴動の関わりについて、詳しくは矢次「ディケンズが描いた他者の歴史」(4-5)を参照。
8. 例えば、ギルモアによれば、『フランス革命』は「黙示録的かつ循環的で、時間の亡霊が奏でる熱狂的な音楽に合わせて男女が踊っているような歴史観」を保持している(Gilmour 32)。
9. ウィレットに限らず、『ラッジ』における父親たちは次世代が誇るべき先達としての役割を果たせないばかりか、次世代を精神的に抑圧している。このような父親に対す

る息子たちのエディプス・コンプレックス的な反応に着目した最初の論考の一つが、スティーヴン・マーカスの「息子と父親」である。

10. ケイスはデニスをラトクリフのパロディーと見なし、ディケンズが歴史とスコットの歴史観の両方を否定している証拠だと見なしている (Case 139-40)。すなわち、実在のデニスには暴動に加わっても死刑を免れたが、ディケンズは『ラッジ』のデニスを絞首刑にすることによって、実在のデニスに関する史実に反する記述をしている。また、スコットが受刑中の盗賊だったラトクリフに対し、ジーニーに護符を与えてその命を守る役割を授けている一方で、ディケンズは、役人の一端を担っていても暴動に加わったデニスを罰することによって、犯罪者に対するスコットの処置を批判しているのである。実在のデニスについては、ブリークレーを参照 (Bleackley xviii)。
11. スモレットも『英国史』の中で、ポーティアス暴動の暴徒たちはよく統率され、慎重であったと記述している (Smollett 252)。
12. スコットはデイヴィッドの厳格すぎる宗教観を肯定していない。スコットはエフィが妊娠の事実を姉に打ち明けそこなう原因として、エフィに対するデイヴィッドの宗教的に偏狭な対応 (100-01) を挙げている。デイヴィッドとジーニーが信心深さは共通していても、寛容さにおいて異なる様子を描出することによって、スコットは長老派の信仰には盟約者<sup>カヴェンター</sup>の時代から 18 世紀にかけて変容が見られることを指摘していると考えられる (Camont xix)。
13. バウエンによれば、歴史を学ぶゴードンは、歴史的な経験と異常な心理状態の関わりというディケンズの関心を裏づけるものの一つということになる (History s Grip 158-59)。確かに、ゴードン暴動は暴徒の狂乱として描かれているが、従来の歴史認識を否定するという『ラッジ』の執筆意図を考慮するなら、歴史を学ぶゴードンは、歴史から教訓を得ようとする事自体が誤りというディケンズの主張を体現していると考えられるべきであろう。

## 引用文献

- Bleackley, Horace. *The Hangman of England: How They Hanged and Whom They Hanged*. Wakefield: EP Publishing, 1976.
- Bowen, John. *The Historical Novel. A Companion to the Victorian Novel*. Ed. Patrick Brantlinger and William B. Thesing. 2002; Oxford: Blackwell, 2005. 244-59.
- . *History s Grip: Barnaby Rudge. Other Dickens: Pickwick to Chuzzlewit*. 2000; Oxford: Oxford UP, 2003.
- Byatt, A. S. Robert Browning: Fact, Fiction, Lies, Incarnation and Art. *Passions of the Mind: A Provocative Collection of Essays on Subjects Ranging from George Eliot to Toni Morrison*. 1991; New York: Vintage, 1993. 21-62.

- Case, Alison. Against Scott: The Antihistory of Dickens's *Barnaby Rudge*. *CLIO* 19.2 (1990): 127-45.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. 1841; Harmondsworth: Penguin, 2003.
- . *David Copperfield*. 1849; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Foucault, Michel. *Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason*. Trans. Richard Howard. 1965; New York: Vintage, 1988.
- Gilmour, Robin. *The Intellectual and Cultural Context of English Literature 1830-1890*. London: Longman, 1993.
- Kroeber, Karl. *British Romantic Act*. Berkeley: U of California P, 1986.
- Marcus, Steven. Sons and Fathers. *Dickens from Pickwick to Dombey*. 1965; New York: Norton, 1985.
- Scott, Walter. 1818; *The Heart of Midlothian*. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Smollett, Tobias. *The History of England*. Vol. 2. London: Virtue, no date.
- Storey, Graham and Madeline House, eds. *The Letters of Charles Dickens*. Vols. 2-3. Oxford: Clarendon, 1965.
- Trevor-roper, Hugh. Introduction. 1968; Lord Macaulay. *The History of England*. Harmondsworth: Penguin, 1986.
- White, Hayden. Historical Emplotment and the Problem of Truth. *Probing the Limits of Representation*. Ed. Saul Friedlander. Cambridge, MA: Harvard UP, 1992. 37-53.
- 高橋裕子, 高橋達史 『ヴィクトリア朝万華鏡』 新潮社, 1993 .
- 矢次綾 「ディケンズが描いた他者の歴史 『バーナビー・ラッジ』」 『九州英文学研究』 23 (2006): 3-14 .